

学校づくりへの思い

三春町の学校づくり

元三春町教育長 本田忠治

学校荒廃が話題になった1980年代、三春町はその原因の一つに偏差値教育や一斉画一教育の弊害が出ているとにらみ、先ずもって一斉画一教育から脱却し個性化教育に転換しなければと、教育改革の方針を打ち立てた。

当然のことながら、教師の教育観や指導観の変革を求め、指導内容や指導方法の転換により日々の授業が変わっていくことを期待した。

町独自に指導主事・英語指導助手を招聘（県下初）、各学校選出の学校教育研究会を設置して国内外の先進地視察、授業を含む共同研究、国際交流による教員の長期米国派遣等を実施して、「子供と教師の夢の育つ学校づくり」を実践した。校長と教委会職員との学校経営懇談会は、毎月開かれ校長も大いに勉強した。

同時にこれを支えるものとして、第二次施設整備計画を策定、10年間で幼稚園2園、小学校3校、中学校5校の新築・大規模改造を完成した。

そのねらいは、教え易さより、学びやすい学校施設づくりで、その過程では統廃合、新設、学区の見直しなど、正

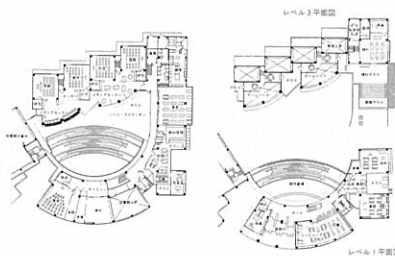


野外劇場を前にレベル2をみる

式な審議会や検討委員会などのほか、多くの地区住民や先生方との数多い話し合いを重ねながら改革を進めてきた。その結果導き出されたものは、小学校はオープンスペースをもった学校、中学校は進路の自己決定に寄与できる強化センター方式を導入し研究実践を重ねた。（県下初）

建築の実際には、中央の一流の建築家や教育学者の参加を得て「三春町学校建築研究会」を設置し、長澤悟氏を常任のコーディネーターとして教委や学校の要望を取りまとめ、設計の先生方とのやりとりで、各校の特色を生かし、しかも一貫性のある実施計画にまとめたいたことは本当に大きかった。東大から日大へ席を替え、三春に居を移して、この事業に心血を注いでいただいた。

平成11年、第1回朝日のびのび教育賞を受賞し、「行政・学校、住民が一体となって三春の教育と呼ばれる新しいデザインに基づく校舎建設や授業づくりを展開し、教育改革における一つの方向性を示されました。」と評価されたことは、町として本当に嬉しかった。



要田中学校レベル2平面図



地域と時代を映す学校づくり

本間利雄設計事務所十地域環境計画研究室 代表 本間利雄

新しい学校づくりを学ぼうと、21世紀教育の会に入会したのは、四半世紀も前のことだ。ハモニカタイプの平面型が当たり前の時代に、オープンスクールがいかにか教育の器としてすぐれているか、諸外国の事例等をもとに亀田佳子・長倉康彦・長沢悟の諸先生方から教えられた。時代と地域に即した新しい学校づくりは新鮮であり、有意義に思えた。

それからは学校づくりのたびにオープンスクールの意義や具体化を熱く語ったものだ。

その初期の学校のひとつが、私の生まれ故郷の山形県小国町、豪雪地の飯豊山麓に位置する小国町立小玉川小・中学校（1985年竣工）だ。児童・生徒数の十数名の小・中併設校だが、長沢先生のご指導を頂きつつ、地域とともにある学校づくりを目差し、セカンドスクールとしての活用等を盛り込んだ意欲あるものがつくられたことは忘れられない。

しかし過疎や少子高齢化の問題は大きい。今や中学校は統廃合され、小学校も昨年に続き入学者が0と、学校



小玉川小・中学校

そのものの存続が危ぶまれている。

上杉藩の伝統が色濃く残る山形県米沢市にあって、1901年に女学校として発足し、1999年に男女共学の高等学校となった九里学園高等学校では、登録有形文化財となっている校舎を保存活用しつつ、長倉先生とともに新しい教育の場をつくることができた。

そして私共が関わった最も新しい学校として、本州北東端の青森県下北半島に位置する東通村立東通小学校が、村内に16あった小学校のうち11校を統合し、昨年4月に開校した。村の内陸部に見られるマンサード屋根型を地域に根ざしたデザインモチーフに厳しい風土さに立ち向かう雄々しさや強さを表し、上部構造として積極的に木造を取り入れ、森のようなやさしさが内部の変化ある空間を包む。

変革と今日性は、学校づくりに常に求められる。過酷な現実を前に学校建築の再生も新たな地域の課題となりつつある。



東通小学校

